連載II

当財団専門委員

わたしの1冊

第10回

「風景学入門」中村良夫 著 中公新書 1982年

跡見学園女子大学・観光コミュニティ学部 教授
安島博幸

私の専門は、観光地計画である。風景、美味しい食べ物、地域の文化、歴史などを訪れる人に最大限、楽しんでもらい、また、その結果として、観光地として持続的に発展することを願って計画づくりをすることが最終的な目標である。この目標に対して、当初は、工学的アプローチによって新しい世界が開けると信じていた。当時は、コンピュータが計画に使われ始めた時代で、統計解析や地図データをデジタル化して地形解析を行なったり、また計量心理学の手法を取り入れるなど大きな可能性があると考えていた。

しかし、その方法論の転機になったのが、皮肉なことであるが、観光計画とは、やや離れた送電線の景観対策計画であった。当初は、送電線の景観への影響要因を多変量解析によって分析し、改善点を提案したり、心理実験の方法を工夫したりと景観工学的手法を使って、対策を検討し、それなりの結論は得たが、納得いく結果ではなかった。送電線の景観対策は、あくまで影響を少なくするため対策であって、同じような構造の吊り橋が観光対象となっているように、〝美の対象となる送電線〟になるには、これまでの方法ではとてもアプローチできないもどかしさを感じた。工学的アプローチの限界だった。

さて、前置きが長くなったが、この時に丁度、指導を受けていた中村良夫先生が出版されたのが『風景学入門』だった。入門というには、幅広い知識と学識がないと読みこなせないやや難解な本だったが、一読して、私がぶつかった壁を乗りこえる様々なヒントに満ちていることが了解できた。それは、風景とは主観的な現象であり、人間自体を深く理解する必要があるということだった。つまり、風景を観るということは、群盲、象をなでるがごときで、一つの見方、学問的立場（ディシプリン）から見ただけでは、〝象〟の一部を触ったに過ぎず、象の形を促えることはできない。全体像に近づくためには、異なる方向、見方から観る必要があると気づいた。それ以来、ディシプリンを超越することをためらわなくなった。『風景学入門』の中には、風景についての多くの学問領域をベースにした見方が示されているとともに、文学や絵画など芸術作品が風景と深い関係にあることが多くの事例とともに紹介されている。

この本に書かれていることが、私の送電線景観の取り組みに大きな影響を与えたのであるが、今から振り返ってみると、壁にぶつかって、先に進めなくなった時期に、運良く巡りあったことに感謝している。しかし、当時、問題意識がない漫然とした状態で読んだならば、私自身のそれ以降の観光研究全体への取り組み姿勢を大きく変えるほどの影響はなかっただろう。

風景・景観は、広い意味での観光の一つの分野に過ぎないが、現在も、観光地計画や観光地の持続的発展に関する研究をこの本から学んだ人間の主観を科学するという立場を大切に行っている。

安島博幸（やすじま・ひろゆき）
1950年東京都生まれ。東京工業大学工学部卒業。東京工業大学社会工学科助手、金沢工業大学建築学科教授、立教大学観光学部教授などを経て、現職。工学博士。元日本観光研究学会会長。東京都観光事業審議会会長。観光地、リゾートの計画に関わる基礎的な研究と観光まちづくり計画の方法論を研究対象としている。最近、特に関心を持っているテーマは「観光地・リゾートの歴史的研究」および「観光地の持続的発展に関する理論的研究」など。